別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　荒川　徹

荒川徹氏の博士（学術）学位請求論文『ミニマリズムとパースペクティヴ』は、1960年代以降のアメリカのミニマリズム（ミニマル・アート）の美術について、とくにドナルド・ジャッドの作品を中心に、その発生と展開のプロセスを「パースペクティヴ」という観点から総合的に考察した論文である。

本論文は三部からなる。第１部「芸術と工学」の第１章「人工風景の経験」では、1951-52年に未完成の高速道路を自動車で夜に走行したトニー・スミスの体験を筆頭とする、大規模な建築・人工風景の経験のうちに、初期ミニマリズム発生の要因が探り当てられている。風景画から出発し、段階的な抽象化を経た画業ののち、ジャッドもまた、美術批評家として、工学的構造を代表とする非芸術と芸術との本質的な差異を否定するにいたった。非芸術および工学的構造への強い関心はロバート・スミッソンにも継承され、人工的風景それ自体を芸術として把握する「見ることの芸術」が開拓されてゆく。それは彼らの制作する作品そのものに反映し、非芸術的な人工風景と作品との共作的関係のほか、第２章「構造と形態」で詳しくたどられるスミスとジャッドの三次元作品のように、科学的ダイアグラムや力学的に効率的で強度の高い構造への関心となって表われることになる。この第１部の議論によって荒川氏は、ミニマリズム的な形態の還元が、一般に言われるような単なる抽象化にとどまるものではなく、非芸術的な工学的構造をとらえるパースペクティヴと深く関係していたことを明らかにしている。

第２部「系列的方法」では、まず第３章「パースペクティヴとプロポーション」において、1966 年の個展におけるジャッドの「数列（プログレッション）」を構成原理とした作品群が分析される。これらの作品については従来、構造を決定している客観的原理を主張するジャッドの理論に対し、それを裏切るような作品のイリュージョニズムがたびたび指摘される傾向にあった。荒川氏は作品構造の緻密な解読と作品経験の入念な検討により、そこに単純なイリュージョニズムにはとどまらない、展示空間全体と相関して形成される「プロポーション」の感受という、一種の音楽の聴取にも似た視覚的経験を導く関係性が存在していることを突き止めている。

続く第４章「次元の変換」では、ブロックの写真をグリッド状に配置したメル・ボックナーの作品や遠近法的な視像の縮小それ自体をモチーフとして作品化したスミッソンの彫刻などが取り上げられている。荒川氏はこれらを、三次元から二次元への変換法であるパースペクティヴを、ジャッドの作品に通じる「系列的構造」としてとらえようとした、数学的できわめてコンセプチュアルな手法による産物と位置づけている。

このような形式化の飽和点で再び見出されることになるのが「風景」である。第３部「土地と配列」の第５章「風景への回帰」では、ダン・グレアムが住宅団地（トラクト

ハウス）の配列を撮影し論じた記事「ホームズ・フォー・アメリカ」、および、スミッソンがニュージャージーを旅行し、その地での採集物を組み込んで制作した作品の分析を通じて、彼らがミニマリズムを経た視覚によってどのように郊外風景を再発見していたのかが考察されている。物体のうちに数学的形式として埋め込まれたパースペクティヴはここで現実の土地へと回帰し、たとえばグレアムの撮影した郊外住宅の風景のように、いわば「（再び）見出された系列的構造」として記録されるのである。

第６章「荒野という文脈」は、1968 年以降におけるジャッドの、建築のリノヴェーションやテキサス州マーファの荒野に設置された大規模作品を対象として、先行して存在する建築・土地という「コンテクスト」との間に作品がどのような関係性とパースペクティヴを構築しているかを考察している。とくにマーファに作られたコンクリート作品については、現地に赴いたうえでの詳細な分析がなされ、いくつかの要素的なコンクリート・ユニット群の配置関係のうちに、1km、数時間に及ぶ鑑賞者の移動によってはじめて感受される、ある種の音楽的な展開が胚胎されていることを明らかにしている。

以上のように荒川氏は、ジャッドを中心としたミニマリズムのうちに、巨大な工学的構造が形成する人工風景からの触発、そのような視覚経験の数学的系列への形式化、そして、そこでかたちづくられたミニマリズム的視覚による現実風景の再発見という発展の論理があったことを鮮やかに浮き彫りにしている。その論証の過程では、ミニマリズムが現代美術史上の単なる還元の美学にとどまることなく、工学・数学・音楽といった美術の外部の諸領域と深く関わり合った現象であったこともまた明らかにされている。本論文はこのように、従来あまり重視されてこなかった工学的風景との関係をひとつの軸として、ミニマリズムを一貫した視座のもとに提示しており、ミニマリズム研究にとどまらず、現代アメリカ美術、ひいては同時代の社会・文化の研究にも大きく寄与する成果であると評価できる。

審査委員からは、本論文の堅固で明快な構成と論述を高く評価する一方で、既存のミニマリズム論が利用してきた理論や美術史的な文脈化に対する批判がやや硬直化しているのではないかといった指摘や、パースペクティヴの効果などに関するミニマリズムに先行する美学思想を検討する必要性、幾何学的秩序と音楽の対応をめぐるピュタゴラス以来の思想的系譜をさらに考慮すべきこと、「非芸術こそが芸術的には重要である」という判断自体が「芸術的」視点であるという、マルセル・デュシャンなどに遡る問題系をより吟味すべきこと、論文の中心をなすジャッドの作品、とくに絵画作品の変化の追跡がなお不十分である点、工学的構造それ自体とも芸術とも区別される「建築」とミニマリズムとの関係性への目配りといった点をめぐる批判的な意見があった。しかしながら、これらは本論文の内容の豊かさに触発されたものであり、その学術的価値を損なう決定的な瑕疵とは言えないという点で、審査委員全員の意見が一致した。

以上を鑑み、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。